



パラリンピックならぬ、「パラ研究会」の立ち上げ

坊農 真弓 国立情報学研究所



2015年8月22日、国立情報学研究所において本会アクセシビリティ研究グループ(AAC)の第1回研究会が開催された。当日は筆者を含む運営委員の予想をはるかに上回る盛況ぶりで、研究会後の打ち上げではこの大成功に興奮冷めやらぬといった感じでグラスが空くペースがとても速かった。どうして我々の予想を上回ったのか、そしてどうして大成功だったのかを少々紙面をお借りして簡単に紹介したい。

まず、立ち見が出るほどだった参加者の人数はいうまでもなく、参加者みなさんのそれぞれの背景が圧巻だった。手話通訳者を同伴された参加者、指点字介助者を同伴された参加者、白杖をついてこられた参加者、盲導犬を同伴された参加者、電動車椅子でこられた参加者、といったようにさまざまな経験や体験を持つ当

事者の方々に数多くお越しいただき、活発な議論が行われた。

学会の研究会といえば、通常参加者の大半は研究者である。AACは「障害者や高齢者を支援する情報処理技術の研究開発を通して、だれもが積極的に参加できる社会の実現を目指すコミュニティ」として昨年(2014年)立ち上げられた。本会誌Vol.56, No.6でも特集を組み、我々が目指す方向性を提示してきた。我々が最も強く意識しているのは、「当事者を巻き込む」ことである。近年、なんらかの障害を持った当事者が、自らを研究するプロジェクトが複数進められている。研究者は当事者の声を聞き、これからの情報処理技術の在り方を考えていく必要があるだろう。そこで、我々が目指したのは、パラリンピックならぬ、「パラ研究会」の立ち上げである。



キックオフで「米国 ACM に 35 年遅れている」と怒る喜連川前会長



ニコニコ生放送(左手スクリーン), 手話通訳者, 発表スライド, 登壇者, 日本遠隔コミュニケーション支援協会(NCK)によるPC通訳(右手スクリーン)

パラリンピックの語源や由来をインターネットで検索してみると、下半身不随を意味する「paraplegia」とオリンピックをつなげた造語で、1985年以降、半身不随以外の身体障害者も大会に参加するようになったため、平行を意味する「parallel」とオリンピックの造語として現在は用いられている、と記載されている。我々が目指した「パラ研究会」は、研究者だけで集まる「研究会」とパラレルに開催し、当事者自身が自らの研究を発表したり、最先端の研究発表を聞いて、新たな研究テーマを思い付く場としてデザインしたつもりである。パラリンピックとの違いは、そこに研究者も参加するところである。そのために今回最も力を入れたのが、情報保障である。

情報保障といえば、聴覚障害者のための手話通訳やPC通訳がすぐに思い付くだろう。我々は前半のセッションでは特定非営利活動法人日本遠隔コミュニケーション支援協会(NCK)の協力を得て、講演に字幕を付けた。また後半のセッションでは京都大学情報学研究科河原研究室の提供で音声認識・字幕生成システムを運用し、講演に字幕を付けた。研究会に参加された聴覚に障害をお持ちの方々はこちらの字幕と手話通訳を介して、講演を聞く、講演をするということが可能となった。また、それだけではなく、当日参加することができない人々に対して、字幕が付けられた講演映像をニコニコ生放送で配信するという試みを行った。

ニコニコ生放送の視聴者は午前813名、午後515名で、ニコニコ動画でお馴染みのコメント挿入のやり方で発表者にエールを送る、感想を言うなどの振舞いが見られた。こういった双方向のやりとりが可能なオンラインの情報保障は世界的にも例がなく、画期的であったと自負している。しかしながら、改善すべき点もいくつか観察できた。たとえば、当日ご講演いただいたり、議論に参加いただいた自閉症当事者の方々は、独自の情報の受け取り方をされるため、今回のように多種多様なスタイルで同一内容を一気に流すやり方は、情報受信を困難にさせてしまったようである。結果的に、誰かのための情報は誰かにとっては困難を強いてしまう可能性を目の当たりすることとなったが、研究会のユニバーサルデザインの1つの形として我々の理想を示せたと思う。

AACの試みはまだ始まったばかりである。第2回研究会は来年2016年2月13日に同じく国立情報学研究所で開催予定である。まだまだ検討の余地がある我々の活動ではあるが、第1回研究会がここまで多くの人の期待を背負って大成功を収めたことは、本当に感動的な出来事だった。アクセシビリティ研究に馴染みがない方々も、我々が目指すパラ研究会を目撃しにぜひご参加いただきたい。

(2015年9月30日受付)